

【学校向け・地域向け】【協力・実践形態：長期・単発】【本会ホームページへの掲載：あり・なし】

「福祉・ボランティアとは」

月脇 美智子

【推進員認定期】第2期

【所属】自治会見守りネット(個人ボランティア、元中学校教員) 【活動エリア】県内西部を中心に県域

学習対象者	小学生(年生) 中学生 高高校生 住民 その他(初任者教員)
内 容	障がい理解(車いす体験、アイマスク体験、当事者と交流、施設体験、その他()) 高齢者理解(高齢者疑似体験、当事者と交流、施設体験、その他()) その他の理解(講話「福祉とは?ボランティアとは? 授業実践について」)
所用時間	1回あたりの時数:45分(講話)
ねらい	事前にガイドヘルプ・アイマスク体験を実施。 その後を受けて「福祉」についての基本の知識と受講する教師個人の福祉に関する姿勢と、授業を実施する時の注意事項。

はじめに

「ふくし」とは? 事前に考えて置くようにしておく。

福祉は、特別の人のものではなく、一人ひとりの普段の生活の幸せを守ることを確認する。

豊かな福祉観・貧困なる福祉観について例を挙げて話し、教師の考え方で例を挙げて間違った方向に導いてしまう危険性を伝える。

実践内容

福祉について 世界での歴史・日本での流れ・そして現在の考え方

日本国憲法・法律の確認

ドイツ憲法「生存権よりも人間の尊厳を上におく」の内容を理解する。

質問形式で「自分の立場で福祉の授業をどう展開するか?」

・「総合」「道徳」「特活」などの授業ではなく、普段の授業の中での実施の仕方を考える。

・特に中学校では専門教科の中での実践方法を同教科どうしで話し合う。

・日常のどんな時も「ふくし」の心を心がけることの大切さを確認

・上下の関係ではなく、いつも横の関係で考える。

・「か・き・く・け・こ」を大切にすることを最後に確認 カー考える キー聞いて見る クー工夫する

ケー経験(体験)する コー行動する

どんなに「福祉」を学んでも行動に結び付けなければ何もならない

ここがポイント！

「福祉」は特別な人のことではなく平常の生活の中でその心を活かして生活していくことを自覚する。理論だけの学習ではなく、障害当事者との交流や体験を通して学ぶことの大切さを強調する。担当者が「福祉」の授業をするのではなく、全教師が実施。特別な授業の中で「福祉」の授業をするのではなく、普段の授業の中で実施する。「福祉」の授業をやっているからと言って、生徒が全員優しくなるわけではない。「福祉」の授業は種を蒔くのであって、それもすぐに芽が出るわけではない。花が咲き、実がなることを期待する。それでも、種は蒔かないと芽が出ない。「福祉」の授業が始まってから、確実に世の中は変ってきている。(講師の実感)生徒の服装・態度だけで「福祉」の授業は伝わらないと思い込まないこと。必ず振り返りを行う。

成果と課題

現在の初任の教師は学生時代に「福祉」の体験を含めた授業を受けている人が多いので理解しやすい様子だった

ただ、自分の授業の中で活かすことまでは考えておらず、総合・道徳・特活などの中でと思い込んでいたことがうかがわれる。今後は、各教師それぞれの実践にゆだねられると思う。

ここ数年来、県立高等学校初任者研修や、市義務教育教員の初任者研修で「福祉」の講話を持たせていただいている。その時に標題に掲げた「いつでも どんな時にも『福祉』の心を！！」のテーマを中心に話を続けている。

その時に必ず、自分の専門教科の中で一部分でも良いから「福祉」の視点の授業を入れるとしたらどこの場面でどんな風に入れていくかと言う設問をしている。特に数学、物理等なかなか入れにくいと考えているであろう教科の教師を指名している。

最後に、二進法などを使っての点字学習を実践している例。急速冷凍を使うと料理の口当たりが良くなり新しい料理の開発につながっているということを聞いて嚙下障害の高齢者への料理への応用につながると考えた料理学校校長の発言などを提示している。

授業展開については社協へ相談すること、また社協を通じて「あったかウェルねっと」への相談することも可能ということを理解できた様子

授業を終えて、良い感想文や振り返りシートが完成されただけで満足するのではなく行動に結びつけることの大切さを強調したが…授業実践にまでつながったかどうかは不明。

この教師たちが少しでも「福祉」の心を持って教師生活をスタートしいって欲しいと願っている。